

南洋勸業会はなぜ開催されたのか

—— 清末新政の特質についての一考察 ——

小羽田 誠 治

はじめに

第1節 端方による提案から

第2節 博覧会の誕生と日本の博覧会政策

第3節 南洋勸業会における日本の内国博の影響

第4節 南洋勸業会と中央政府との関わり

結論

はじめに

2010年に開催された上海万博のちょうど100年前の1910年、南京において開催された「南洋勸業会」は、中国において史上初めて開催される全国規模の博覧会として、内外の注目を集めた。清朝で光緒末期より展開されていた「光緒新政」あるいは「新政」と呼ばれる諸政策の一環として行われたこの意欲的な試みは、従来その「近代性」を高く評価されていたが、政策自体は多くの構造的な矛盾を抱えており、為政者の現実認識の甘さを露呈したものであったことは、すでに別稿にて指摘した¹。

しかし、ではなぜ数ある近代化政策の中でも、これほどまでに大がかりで、莫大な時間と費用を要した博覧会が熱心に推進されたのであろうか。この疑問もまた、単に博覧会を「近代的」で「開明的」な政策とのみ捉えている限りでは、理解しにくい。新政は確かに、都市化の進展をもたらし、各種工場の建設や警察・商会の創設、鉄道の整備など、現代にもつながる様々な意義のある政策を行った²。だが、その一方で、それらが断片的で在地社会と乖離した面を持っていたこともまた指摘できる³。つまり、中国の内的発展を強調するあまり、政策を行う側と行われる側の一体性を無条件に前提としてしまっただけで、中国社会の重層性や諸々の構成要素の間のズレを見過ごしてしまうことになるのである。

本稿では、世界における博覧会の歴史を簡単にたどり、それが日本に伝播する過程である種の転

¹ 小羽田誠治「南洋勸業会の実態と清末における近代化政策の限界」(『集刊東洋学』104、2010年10月)。

² 新政に関する研究は、本稿第4節でも触れる倉橋正直「清末の実業振興」(野沢豊・田中正俊編『講座中国近現代史3辛亥革命』(東京大学出版会、1978年))ほか多数あるが、比較的網羅的であつ新政に対して高い評価を与えているものとして、劉世龍『中国の工業化と清末の産業行政——商部・農工商部の産業振興を中心に——』(溪水社、2002年3月)を挙げておく。

³ 例えば、小羽田誠治「清末成都における勸業場の設立」(『史学雑誌』112-6、2003年6月)を参照。

換が起こったことを論じる。そして、清朝は日本の成功に影響を受けてはじめて、博覧会を産業振興のための重要な政策として位置づけ、南洋勸業会を企画するに至ったことを見るとともに、この博覧会政策を推進した端方が、これを中国国内の文脈とは別に行っていたことを明らかにする。これにより、清朝の新政における特質の一面を明らかにしようというものである。

第1節 端方による提案から

南洋勸業会は、光緒34(1908)年11月、時の南洋大臣兼两江総督端方の上奏により創始された。その目的について、端方は以下のように述べている⁴。

思うに、富強の策は必ず産業の発達を鍵とし、それを推進する方法は、集まって競争して進歩させるのが最も良い。欧米諸国は常々農工商の各品目において博覧会を設け、比較・研究させている。……中国は交通が不便であるため、農工商は旧習を守るものが多く、未熟なままで、富は外にあふれ、取り戻す術もない。……私は、先年欧米に出使し、農工商業の隆盛は競争と激励によらないものはないと拝察した。

即ち、近年の新政によって産業は発展しつつあるが、相互の交流がないという現状に鑑み、欧米諸国の先例に倣い、比較・競争によって商工業の進歩を促すことにあった。しかし、ここで何の疑いもなく語られている「博覧会＝産業振興の方法」という認識は、果たして自明の事柄なのだろうか。

鈴木智夫氏によれば⁵、19世紀後半の中国においては博覧会への理解と認識は極めて消極的であった。中国からの出品自体は1851年のロンドン万国博からなされているが、それは中国駐在の外国公使によるものであり、清朝政府は否定的であった。その後、洋務運動期から80年代にかけて、一部の官僚を中心に出品活動を行うようになるが、その目的はいわば国威の発揚であって、経済上のもものではなかった。

このように、19世紀の後半までは博覧会に経済的価値を認めていなかった清朝であるが、では、20世紀初頭にはなぜこれほどまでに博覧会に対する認識が変わっていたのだろうか。それを解明するには、まず博覧会の歴史を一瞥しておく必要があるだろう。

第2節 博覧会の誕生と日本の博覧会政策

博覧会は、1798年のパリ産業博覧会を嚆矢とする⁶。当会はフランス革命とナポレオンのエジプト遠征のさなか、フランス産業の活力を内外に示すために行われたものであった。その後、博覧会と

⁴ 端方『端忠敏公奏稿』巻13「籌辦南洋勸業會摺」、「竊維富強之策、必以實業發達爲要圖、而獎勵之方、尤以合羣競爭爲進歩、泰西各國、常於農工商各項品物開設博覧會、以資比較、以供研求、……中國以交通不便之故、農工商等多守舊法、簡陋相仍、利源外溢而無計挽回、……臣前年奉使歐美、察其農工商業之盛、無不由比賽激勵而來」。

⁵ 以下、中国の万国博への参加については、鈴木智夫「万国博覧会と中国」(『愛知学院大学人間文化研究所紀要人間文化』11、1996年、のち同『近代中国と西洋国際社会』(汲古書院、2007年)に所収)を参照。

⁶ 以下、欧米の博覧会については、吉田光邦編『図説万国博覧会史 1851-1942』(思文閣出版、1985年3月)及び吉見俊哉『博覧会の政治学——まなざしの近代——』(中央公論新社、1992年)を参照。

いう制度はフランスや欧米各地に伝播し、徐々に規模を拡大し、1851年には当時工業化の最も進んだイギリスにおいて、ロンドン万国博覧会として結実したのである。

吉見氏によれば、博覧会は「帝国主義」「消費社会」「大衆娯楽」の3要素から成り立っていた。それゆえに、当時いち早く産業革命を終え、世界各地に植民地を保有していたイギリスや、それに追随するフランス、アメリカなどの先進国において盛んに行われた。以後20世紀に至るまで、博覧会是一种のブームと化すが、それは世界をパノラマ化し、創出する大衆の欲望を都市自体とともに可視化した、いわば繁栄の結果だったと言える。

ところが、この繁栄の結果を原因ととらえ、富国強兵政策への積極的な導入を試みたのが、日本であった。1862年に幕末の遣欧使節団がロンドン万国博覧会を観覧すると、早くも1867年のパリ万国博覧会には出品を行っている。そして、その意義を認識した明治政府は、70年代には国内規模の内国博覧会を企画していくのである。内国博覧会は1877年から1903年にかけて、計5回開催されているが、國雄行氏の研究に基づき、その概略を以下に述べる⁷。

第1回から第3回までは、いずれも東京上野で開催された。第1回(1877年)は博覧会と伝統的な「見世物」の区別を強調した。西南戦争勃発のため、入場者は予想を下回ったが、政府はその有用性を実感した。第2回(1881年)は中央集権化が進むなか、地方の協力体制が強まり、前回をはるかに上回る出品と入場者があったが、自発的な出品は少なかった。第3回(1890年)ではアジア博覧会構想が起こるが挫折し、規模を拡大させるにとどまった。しかし、マンネリ化や売れ残りが目立つようになり、また審査への不満も現れた。

第4回(1895年)は平安遷都1,100周年を記念して、京都で開催された。しかし、日清戦争の影響や京都の市場価値の低さのため、出品は振るわず、低調に終わった。第5回(1903年)は大阪で行われ、台湾館や外国の参考館を加えるなど大幅に規模を拡大した。また、パビリオンその他の余興が積極的に行われ、産業博覧会から遊興博覧会への過渡となった。

以上のように、日本で行われた内国博覧会は着実に成果を重ね、その他の富国強兵政策と歩調を合わせて「成功」を収めたのである。ただし、成功を収めるための背景や政府側の集客への努力もまた理解しておく必要があるだろう。

第3節 南洋勸業会における日本の内国博覧会の影響

端方が欧米諸国の富強ぶりを目の当たりにして南洋勸業会の必要性を痛感していたことは、先の上奏により明らかであるが、特にそれを導入した日本に対する意識は強かった。本節では、南洋勸業会の開催にとって、日本で5回にわたって開催された内国博覧会がどれほど直接的な影響をもたらしたかを明らかにする。

⁷ 以下、國雄行「博覧会の時代——明治政府の博覧会政策——」(岩田書院、2005年)を参照。

1. 産業振興の模範

まず、端方は博覧会の効果について語るにあたって、日本の目覚ましい成功を例に挙げ、以下のように述べている⁸。

日本ははじめ西洋の方法に倣って、これ（博覧会の効果——筆者註）に注意し、内国博覧会を設け、専ら国内の農工商の出品物を集め、並べて考察し、拙いものには改良を促し、優れたものには特に報奨を加えた。すると、農工は競い励み、商業は勃興し、その成功の速さは各国が皆驚くところである。

そして、勸業会の準備段階においても、各地で物産会を組織して出品物を蒐集するという基本的な方法が日本の例に倣ったものであることが、宣統元（1909）年4月の上奏で述べられている⁹。

今、官紳を選んで各地に派遣し、物産を調査させ、工商を連絡させ、勸業会の指導者とする。一方で日本の例を参照して、規定を作り、両江の管轄する各府県に通知し、先に本年中に物産会を開催させる。

そして、これを受けて両江でいち早く物産会を開くこととなった蘇州では、以下のように日本留学経験者が調査員として選出されている¹⁰。

蘇州府の何太守が蘇州商務總會に次のような文書を出した。総督の文書によれば、中国の博覧会は初めてのことであるから、商情に通じた人員にそれぞれ調査させなければ、成果を収めることは難しい。ここに選出する日本法政卒業生の蘇高鼎、日本清華学校卒業生の蔣鳳梧は蘇州・太倉に属する地方の状況に素より詳しく、当該府州の調査員として派遣し、当該の監督と共に宣伝に励ませる。

この他の事例では、特に日本留学経験の有無は明示されていないのだが、出品物蒐集に先鞭をつけた蘇州の例は看過できないだろう。

さて、各地で出品物を蒐集するにあたって、運営側は日用品を主とする方針を打ち出しながらも、実際には珍奇なものが多く集められ、南洋勸業会が伝統的な「賽珍会」を脱し切れていない面があったことは、すでに別稿で指摘した¹¹。出品物の蒐集が開始されて約3カ月後、その方針を再度確認する通告が事務所より出されたが、そこでも日本の事例が引かれている¹²。

フランスパリ博覧会では世界に二つとない象牙製の時計が表彰されなかった。日本の大阪博覧会では装飾の豪華な品物が多く、日用の必需品は少なかったが、その国の新聞では生計の問題が忘れ去られていると嘲笑された。これらよりわかる通り、会の本来の姿としては、各地の特

⁸ 端方「籌辦南洋勸業會摺」、「日本初仿西法、即注意於此、設内國博覧會、專取本國農工商之出品、羅列考較、拙者勸以改良、優者特加獎勵、由是農工競勸、商業勃興、程功之速、各國咸相驚異」。

⁹ 端方「端忠敏公奏稿」卷14「籌備南洋勸業會摺」、「現正選派官紳、分往各地、調查物産、聯絡工商、以為勸業會之先導、一面參仿日本成例、酌定規章、通飭兩江所轄各府屬中、先於本年擬設物産會」。

¹⁰ 『申報』（宣統元年4月3日）「蘇州物産會成立之詳情」、「蘇州何太守照會蘇州商務總會文云、案奉督憲札開、中國賽會事屬創行、非有熟悉商情人員、分途調查、斷難收效、茲經選定日本法政畢業生蘇高鼎、日本清華學校畢業生蔣鳳梧、於蘇州太倉所屬地方情形素所熟稔、派充該府州調查員、會同該監督實力宣勸」。

¹¹ 小羽田誠治「南洋勸業會の実態と清末における近代化政策の限界」。

¹² 『申報』（宣統元年7月22日）「南洋勸業會事務所通告各出品協會、物産會第一次意見書」、「法國巴黎賽會屏世界無二之象牙製時計不獎、日本大阪賽會裝飾靡麗之品多、日用必需之品少、其國報紙嘲為忘卻生計問題、觀此可悟、會之真相、至本地特産、關係日用者尤宜」。

産品に至るまで、日用に關係するものが適切なのである。

ここでは、あくまで反面教師としての大阪内国博が語られているが、方針を定める上で重要であったことは間違いない。

ところで、各地で物産会や出品協会が実施され、出品物が集められると同時に、外国製品をいかに扱うかという問題が浮上した。南洋勸業会はいわゆる万国博覧会ではなかったが、やはり産業の振興のためには外国製品を展示する必要があると判断されたのである。しかし、その展示方法については慎重を期すべき点があった。つまり、外国製品を人々に見せることが、本国の産業にとってかえってマイナスに作用する危険があったからである。このことについて、『申報』で次のように論じられた¹³。

模倣品と外国のオリジナル品については、相互に比較して進歩・改良を行わなくてはならない。聞くところには、日本がはじめて勸業会を開催したとき、専ら本国の製品で外国製品に対抗するためであり、それゆえに模倣品を陳列するにあたっては、模倣品とオリジナル品を一カ所に並列し、名称を明らかにし、価格を表示し、国民に愛憎の感情を抱かせたのである。我が国では外国製品が盛んになって以来、模倣品は非常に少なく、日用でないものはもちろんのこと、日用の必需品まで、専ら外国製品に頼っている。わが国の財産がこのために外に流出することは年々ひどく、すぐにでもこれを抑えなくては、後の憂いはまことに筆舌に尽くし難い。ましてや我が国民の愛國心は非常に薄く、本国の模倣品を見ても、全く相手にせず、皆外国製品を使うことを競って自慢しているかのようである。この二つの要因により、その結果、我が国はすべて外国製品を用い、財産はすべて外国に流出するであろう。日本が開設した内国勸業会では、すべて別に外国館を設け、外国製品を専門に陳列し、観覧者に供した。この度の南洋勸業会で外国館を設置したのも、日本の方法に倣ったものであり、我が国が外国製品を模造したものやその原物を広く集めてそこに置く。そうすれば、一つには比較・改良のためになり、一つには我が国民に本国製品を用いる気持ちを起こさせられ、まさに一挙兩得である。その他、模倣されておらず、日用必需品となっているものも、その間に陳列し、模倣のための模範とし、我が国民に産業振興の志を持たせることもできる。これは即ち比較を以て産業の発達を促すことである。

こうしてこの問題は、会場の西側にドイツ・アメリカの品物を置く「第一参考館」とイギリス・日本の品物を置く「第二参考館」を建設することで解決したのだが¹⁴、この議論のための根拠や到達し

¹³ 『申報』（宣統元年閏2月17日）「論南洋勸業會與實業界前途之關係」、「至於仿製物之與外國原物、則尤不可不互相比較以爲改良求進之計者、聞日本初開勸業會時、係專爲銷本貨敵外貨起見、故其陳設仿製物也、均以仿製物與原物並列一處、示以名稱、標其價格、以引起國人愛惡之觀念、我國自盛行洋貨以來、仿製之物、甚少冷僻、不常用之物、固無論矣、甚至日常所必需者、亦專爲洋貨是賴、我國財產之以此外溢者、年勝一年、倘不亟謀抵制、其後患誠有不忍言者、況吾國人之愛國心薄弱異常、凡遇本國之仿製物、均厭棄之不遑、一若競用洋貨以爲豪舉者、由此兩因、其結果必至我國盡用外物、財產盡入外國而後已、日本開設內國勸業會、每另有外國館、專陳列外國品物、以供展覽者、此次南洋勸業會有外國館之設、亦宜效日本之所爲、廣集我國仿製之外國物與原物共置一處、一可爲比較改良之資助、一可引起國人愛用本貨之觀念、誠一舉而兩得者也、其餘凡未經仿製而爲日用所必需者、亦宜陳列其間、以爲仿製之模範、藉以引起國人振興實業之志念、此所謂藉比較以促實業之發達者也」。

¹⁴ 南洋勸業會事務所編纂科『觀會指南』（南洋勸業會事務所、1910年）、「第4節 各館暨各重要之建設」、「第一参考館 建築仿英國式、位於會場之西、前臨機械館、所占面積計英尺一百五十方丈、高一丈六尺、凡的美兩國

た結論、そして「参考館」という名称までも、すべて日本の第5回国博を先例としていたことがわかる。

このように、南洋勸業会が出品物の蒐集から陳列の方法まで日本の模倣に努めたことは、もちろん、日本人の目にも明らかであった。当時南京を旅行した教育学者佐藤善治郎は以下のように記している¹⁵。

此博覽會は本名を南京勸業會といふ。老大國が四千年來の保守的思想を脱却し、先進國と駢行せんとする精神より、我大阪に開ける内國博覽會を標準として設計せるもので、その局に當りし者は、多くは我國に來りし留學生である。東京高等商業學校卒業生向瑞昆の如きはその一人である。故に設計等悉く日本的であるは愉快に堪へぬ處である。

以上からわかるように、南洋勸業会は清朝の社会経済の内的発展の結果というよりは、日本の成功を目の当たりにして、これを理念から方法まですべてそのまま導入しようとした結果に他ならなかったのである。

2. 「教育」の価値

上では博覧会と産業振興との関係を中心に考察を行ってきたが、すでに野沢氏も指摘したように¹⁶、南洋勸業会では「教育」もまた重要な目的の一つであった。とはいえ、この教育とは単に陳列館のなかに「教育館」を別に設置しただけでなく、より広い意味を持っていた。ここでは、その教育の内容をもう少し具体的にしたい。

宣統元(1909)年閏2月5日、南洋勸業会事務所は上海の記者たちを招待して、説明会を行った。そこで『輿論日報』の楊千里という人物が、南洋勸業会の諸機関に「考察部」がないことを指摘したとき、幫辦の向淑予が以下のように答えている¹⁷。

勸業会は經濟界を變革する唯一の機關である。というのも、各國がすでに効果を収めていることは諸君の皆知るところであり、贅言を要しまい。しかも、勸業会はまた教育において最も有力なものである。教育の効果というものは、実物で見せるのが最も手取り早い。勸業会場に物品を羅列することで、実物の教育ができるばかりか、人々の興業殖産の觀念を養うこともできる。近年の新聞を見ると、政治と教育を極力提唱しているが、勸業会もまた政治と教育の二者を共に重視しているのである。

つまり、未知のものに実際に触れさせることによって、人々を啓蒙しようとする意図が前面に押し出されているのである。

所有出品足供參考者、均列此館。第二參考館 建築仿法國式、位於會場之西、與第一參考館對峙、所占面積計英尺一百五十方丈、高一丈六尺、凡英日兩國所有出品、足供參考者、均列此館。

¹⁵ 佐藤善治郎『南清紀行』(良明堂書店、1911年)、92頁。

¹⁶ 野沢豊「辛亥革命と産業問題——1910年の南洋勸業会と日・米両実業団の中国訪問——」(『人文学報』154、1982年3月)。

¹⁷ 『申報』(宣統元年閏2月7日)「南洋勸業會報界招待會記事」、「閏二月初五日、南洋勸業會開上海報界招待會於福州路之一品香、……由幫辦向君淑予解答、……勸業會者經濟界轉旋之惟一機關也、證之各國往事已有效力、此諸公所共知、不必贅述、且勸業會又爲教育上最有力之物也、凡教育之效、莫如以實物指示爲最捷、勸業會場羅列物品、不僅爲實物教育、且能養成人民興業殖産之觀念、嘗觀近年報章、政治與教育已極力提倡矣、而勸業會實可與政治教育二者相提而並重」。

博覧会が様々な面において教育的な意味を持っていたことは、すでに欧米の事例から説かれていることであるが、それはあくまで副次的な効果としての意味合いが強かった。現実には、観覧者たる大衆が求めたのは「娯楽」であり、博覧会のブームとともにその傾向が強まっていく過程は吉見氏などが示しているとおりで¹⁸。

それは日本においても同様であり、上述したような第3回のアジア博覧会、第4回の京都遷都記念、第5回のパビリオン政策など、博覧会にイベント性を持たせることに苦心していた。だが、明治政府は博覧会をあくまで産業振興の政策として位置づけていたのも事実であり、これが結果的に成功をもたらしたことは、おそらく清朝に希望を与えたことだろう。結果、南洋勸業会は上に見るように、あくまで教育を強調するものになったのである。

とはいえ、この「教育」という理念に沿った博覧会政策は、為政者と大衆との乖離をもたらすこととなった。近代的な技術力に乏しい中国の産業構造において採られた「教育」の具体像は、せいぜい一部の有識者が従来の産業を批判的に検討し、改良を促すものに過ぎなかった。娯楽を排除された博覧会は、多くの観覧者にとって魅力のないものになってしまった。その教育の構図が博覧会の当初の目的とは全く異なるものであったことは、すでに指摘したとおりである¹⁹。

第4節 南洋勸業会と中央政府との関わり

最後に、本節では、上のような経緯で開催されるに至った南洋勸業会が、当時全国規模で行われていた新政の一環と位置づけられつつも、他の諸政策との関連が希薄であったことを明らかにする。このことは、従来から言われている新政——特に1906年以降における——の地方化の状況を再確認するとともに、劉世龍氏の主張する南洋勸業会における中央政府の役割²⁰が、過大評価されたものであり再考を要することを論じるものである。

20世紀に入ると、清朝は新政と呼ばれる改革に着手する。すでに倉橋正直氏が指摘するように²¹、光緒29(1903)年に創設された商部が光緒32(1906)年に農工商部に改組されるに及んで、その財源や政策実行力を低下させたが、地方における産業振興は活発に行われた。倉橋氏は必ずしも明示的ではないが、南洋勸業会が南洋大臣の主導で進められ、農工商部はあくまでそれに協力する、という形式になったことも、その表れであろう。

こと博覧会に関して言えば、劉世龍氏によれば²²、商部設立以後、各地で陳列所が設置され、勸工会や展覧会という地方博覧会も行われていた。そして、氏は中央政府の博覧会に対する前向きな態度から、南洋勸業会への積極的な関わりを主張し、評価している。それでは、南洋勸業会はこれらを下地として必然的に発展したものであろうか。

まず、少なくとも端方の認識としては、南洋勸業会は地方博覧会の上部組織ではなかったことは、

¹⁸ 吉見俊哉『博覧会の政治学』。

¹⁹ 小羽田誠治「南洋勸業会の実態と清末における近代化政策の限界」。

²⁰ 劉世龍「南洋勸業会と清末新政期政府の産業振興政策」(『広島東洋史学』3、1998年12月)。

²¹ 倉橋正直「清末の実業振興」(野沢豊・田中正俊編『講座中国近現代史3 辛亥革命』(東京大学出版会、1978年))。

²² 劉世龍「南洋勸業会と清末新政期政府の産業振興政策」。

以下の上奏文より明らかである²³。

近年より朝廷は産業を重視しており、農工商に専門の機関を設け、その振興に専心し、すぐに影響を及ぼしている。ただ、各省は博覧会を行うまでは議論されず、近年勃興してきた工芸や新しい商業は、相互に見習うこともなく、閉塞している。

次に、陳列所については、まず上海では、端方を支援する上海勸業協賛会の陳琪の以下の演説からも明らかなように、その評価は低いものであった²⁴。

私の浅薄な知識では、20世紀の勸業会を語ることなどできないが、外国の博覧会を一瞥してみれば、……その会場の綺麗で完全なることは、筆舌に尽くし難い。しかし、最も私を苛立たせ、永遠に忘れることができないのは、会場にはわずかばかりのものしかなく、彩りもない中国の陳列所である。中国人は博覧会についての知識に乏しく、しばしばそれを外国人に委ねている。そして、端方自身、上海からの出品を呼びかけるに当たって、地方組織の重要性を強調しつつ、陳列所に触れて以下のように述べている²⁵。

上海の紳商には、中国品物陳列所、金石・圖書賽珍会を設置するものもあり、紳商の公益に熱心なことは、当局の提唱するところと一致している。しかし、事はまだ始めたばかりで、範囲もまた偏っており、制度は完備されていない。今南洋勸業会の準備をするにおいて、上海で早急に出品協会を組織し、各都市に上海の紳民には全国を結ぶ義務があるということを提唱すべきである。

つまり、端方は陳列所については認知しているものの、それは南洋勸業会の主旨とは異なると考えていたようである。

以上、構想あるいは理念としての南洋勸業会と陳列所の関係を見てきたが、それでは、各地で実際に出品物を集めるという個別の段階において、陳列所はいかなる役割を果たしたのだろうか。まずは蘇州の事例から見てみよう。物産会の企画にあたって『申報』に以下のような記事がある²⁶。

ただ、物産会を設けるにあたって、閩門外の戒幢寺を会場とするか、あるいは商務局の商品陳列所を借りるか、現時点ではまだ定まっていない。

その後、7月に物産会を開催したときには、以下のように記されている²⁷。

蘇州の物産会監督及び創立員らが話し合って定めたところ、城外にある盛氏の留園の東園を借

²³ 端方「籌辦南洋勸業會摺」、「比年以來、幸蒙朝廷重視實業、特設農工商專部、一以振興爲主、感應之機捷於影響、祇以各直省尚未議及舉行賽會、凡近來最著之工藝、新進之商業、無可觀摩、終虞困塞」。

²⁴ 『申報』（宣統元年閏2月24日）、陳琪「南洋勸業會經營之大概（上海勸業協賛會席上之演説）」、「夫琪薄學淺識、何能言二十世紀之勸業會、顧嘗四閱外國賽會、……其會場之瑰麗完遂、萬語不能罄、而其最激射琪之神經、至於永永不能忘者、莫如會場中太倉粳米、黯淡無色之中國陳列所、國人既乏賽會上之知識、或往往委其事於外人」。

²⁵ 『申報』（宣統元年3月10日）「江督補救上海商業之遠謀」、「江督端午帥札行滬道略云、南洋第一次勸業會事屬創辦、搜羅不易、必須各省各埠就地組織、現具規模、明年開會時始易藉手、現經定議於南洋所屬各府治徵集各府屬物產、組織物產會、於全國各省會及各大商埠徵集各省及商埠物產、組織出品協會、先期陳賽展覽、以爲南洋勸業會之預備、……上海紳商有中國品物陳列所、金石、圖書賽珍會之設、紳商之熱心公益、與該道之提倡有方均可想見、惟事屬草創、範圍或局於一偏、規制未臻乎宏大、茲當南洋勸業會籌備進行之際、亟宜組織上海出品協會、爲各商埠倡上海紳民有衿式全國之義務」

²⁶ 『申報』（宣統元年4月1日）「蘇垣物產會之先聲」、「惟物產會之設擬借閩門外戒幢寺爲會所、又有暫借商務局商品陳列所之說、現時尚未定奪」。

²⁷ 『申報』（宣統元年7月2日）「蘇屬物產會場之秩序」、「蘇府物產會監督及創立員等現經商定、借城外盛氏留園之東園爲場所」。

りて会場とすることとした。

また、近隣の常熟においては、会場選定にあたっては以下のような議論が行われた²⁸。

昨日、無錫から紳・商・学の各界の人士を招き、商会で方法を論議した。そして、繭業公所を会場とし、信成銀行を事務所とすることを仮に決定した。しかし、武陽の紳士たちは非常に不満であり、そこで、今月 29 日に八邑から代表者を選び、郡に赴いて論議し、解決することを定めた。

ちなみに、この物産会は結局、天寧寺という場所で開かれていたことが 7 月 23 日の『申報』に記載されている²⁹。やや遅れて 10 月に鎮江で開催された物産会では、会場は金山河の大綸縲絲廠という工場を借りて行われたようである³⁰。

江南地方以外で開催された出品協会でも、事態は同様であった。10 月 6 日に上海で行われた出品協会では静安寺路の張園が会場となり³¹、11 月 8 日に天津で行われた出品協会では公園が会場となっていた³²。

つまり、新政の過程で各都市に設置された陳列所は、その目的からすれば当然博覧会の性質を持つものであったが、物産会や出品協会を開催するにあたって、名目的にも実質的にも、利用されることは皆無であった。以上から推察するに、南洋勸業会はこれまでの新政の諸政策とは関連なく提唱されたのである。

結 論

これまでの考察をまとめると、以下のようになる。即ち、南洋勸業会は「産業の振興」を目的として企画されたことは間違いないが、そこには歴史的な紆余曲折があった。まず、清朝は元々博覧会については冷淡であり、その意義を認めていなかった。それが、日本が博覧会を幾度にもわたって催し、成功を収めたことを受けて態度を改め、むしろ積極的に模倣していくことになったのである。

ただし、ここで注意しておきたいのが、博覧会とは本来、ヨーロッパにおいて近代的産業や市民社会の発展の「結果」として出現したものでありながら、日本がそれを「原因」として捉えたことにより、その発想が中国にまで及んだこと、即ち、南洋勸業会は日本の明治政府による博覧会認識の転換とその成功を受けて、端方が突発的に日本の制度を直接に導入しようとしたものだったことである。

そのためか、新政時期には陳列所や地方博覧会という一連の政策—— これらも同様に日本の模倣ではあるが—— が行われていたが、これらは必ずしも南洋勸業会に直接的につながるものではな

²⁸ 『申報』（宣統元年 4 月 23 日）「常屬物産會擇地之紛議」、「於日昨來錫邀集紳商學界、在商會籌議辦法、并借定繭業公所爲會場、信成銀行爲事務所、但武陽各紳頗不滿意、現定於本月二十九日、八邑各舉代表、赴郡會議、以資解決」。

²⁹ 『申報』（宣統元年 7 月 23 日）「物産會進行之近狀」、「常郡物産會會場議假天寧寺」。

³⁰ 『申報』（宣統元年 8 月 13 日）「鎮屬物産會籌備情形」、「十月朔日開會、會場擬借金山河大綸縲絲廠開辦」。

³¹ 『申報』（宣統元年 10 月 6 日）「出品協會會場之布置」、「上海協贊會開出品協會、租靜安寺路張園爲會場」。

³² 『申報』（宣統元年 11 月 8 日）「展覽進行會開會紀盛」、「直隸出品協會於本月初一日在公園開會」。

かった。両江総督端方の提案による南洋勸業会は、まさに新政の地方化という流れの中でこそ実現されたものであったが、それゆえに他の諸政策との関連づけが十分に行われることなく実施されることになったのである。

Why Was the Nanyang Exposition Held ?

— Characteristics of the New Policies in Late Qing —

KOHADA Seiji

The Nanyang Exposition in Nanjing in 1910 attracted the attention of the people in and out of China ; it was the Exposition on a nationwide scale held in China for the first time, which was just 100 years before the Shanghai Expo in 2010.

Why was the Exposition on such a large scale promoted, although it might have required so much time and cost to do all the preparations for it ? No answer would be given as long as it is viewed from the perspective of “open discernment” or “modern policy.”

While there is no doubt that the Nanyang Exposition was held to develop the industries of China, there were historical sides to it as well. Qing Court was originally cold-hearted about the exposition, and they did not understand its true objective until they saw how Japan succeeded in her own expositions several times, when they might have thought it would not be bad to try it themselves.

The exposition was a “result” of the development of the modern industries and the civil societies in Europe, rather than a “cause” as Japan had considered it to be. But China tried to follow the footsteps of Japan. The exhibition venues or a series of local expositions in the New Policies era were, like those in Japan, not necessarily connected with the Nanyang Exposition. In other words, the Nanyang Exposition was a part of the policies which, though they introduced from Japan, was not necessarily in accordance with their own domestic policy.